
一人ぼっち異世界

万里雁

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

一人ぼっち異世界

【Nコード】

N8675Y

【作者名】

万里雁

【あらすじ】

俺は何も変わらない日常に飽き飽きしていた。

そんな時目の前に現れたのは怪しげな男と2つの門だった。

え？どっちに行くか選べって？

そうして始まる俺の異世界物語。

どうぞ、よろしく！

ブローグ

そこは白い空と黒い大地だけが世界を埋め尽くす空間。

植物も無ければ動物も居ない、何も動かす只有り続けるだけの静止した空間。

そんな場所を私は居た。

何の為に居るかなんて分からない。

何もすることの無い私はこの世界を観察し始めた。

何の為に見続けるのかなんて分からない。

それでも私は見続けた。この世界を。

いったいどれだけの時間が経ったか私には分からない。

何時までも続いていくかに思えたこの静止した世界だったが、ある時変化が訪れた。

何処からかは分からないが、人影が二つ現れたのだ。

今まで何にも変わらなかったこの世界にやってきた初めてのの変化、私はその2人に興味を抱いた。

どうせこのまま変わらない世界を見続けたって意味が無い、

そう思つて私は彼らに近づいてみた。

近づいて見てみると、その2人は1組の男女で両方とも怪我をしていた。

男の方は酷い傷をしているようで、女はそれを治療しているようだ。

彼らは何かを話しているようで、私はその会話に耳を傾けてみた。

耳を使うのは何時振りだろうか。

最後に使ったのが何時だったかさえ私には分からなかった。

それでも耳はちゃんと聞こえているようで、女が必死に謝っているのが聞こえた。

「ごめんなさい。

ごめんなさい。

ごめんなさい。

ごめんなさい。

ごめんなさい」

「謝るなつて、お前のせいじゃないって言つてんだろ」

「で、でも！」

私があの時……」

「後悔したって何にもなんねーよ。

お前だって怪我してるじゃないのか？」

「こんなのどうって事無い！」

それより、それより——の方が」

「もう俺は駄目だ。

俺なんか放って置いて——は生きろ」

「嫌！」

——が居ない世界なんて私絶対嫌！」

「うめん。

ほんとにごめんな。

お前との約束守れそうに無い。

ほんとにごめ
」

「……え？

——？

——！

——あ！！」

その時、男の命が消えた。

初めて見たはずなのに、私には彼の命が消えていったのが分かった。

そのな事を思っていると、男の体が光に包まれ始めた。

男の体を光が完全に包み込むと、男の体はゆっくりと空に向かって浮かび始めた。

「な、何？

や、やめて！

——を連れてかないで！」

女は必死に男の体にしがみついていたが、怪我をしていたせいか途中でその手を離してしまった。

一度地面に落ちた女はそれでも男にしがみつこうとしたが、男の体はすでに彼女の手の届かない高さまで上がっていた。

男の体はそのままある程度の高さにまで行くと、一際眩しい光を放って消えていった。

その光景を見た彼女は系の切れた人形のように崩れ落ち、泣き始めた。

彼女はひたすら泣き続けた。

私はただそれを見続けた。

この世界を見ていた時のように。

いったいどれくらいの時間が経ったのだろうか、彼女は今まで下に向けていた顔をいきなり上げるといきなり叫び始めた。

「神様でも悪魔でも何だっていい！

私の命でも魂でもくれてやる！

だから、お願い、彼を返して！」

その女の声は悲しくなるほど痛々しくて、私の心に刺さった。

私に心があるなんて分からないけど、何故だかそう思った。

『彼女を救いたい』

それがこの世界に来て初めて私に生まれた意思だった。

でも、私にはどうすれば彼女を救えるのか分からなかった。

何をすればいいのか分からない、とりあえず彼女に近付こうと足を踏み出そうとした。

【彼女を救いたいのか？】

頭の中に声が響いた。その声は初めて聞いたはずなのに、どこか懐かしかった。

【汝に問う。彼女を救いたいのか？】

（救いたい！）

【ならば汝は対価に何を支払う？】

そう聞かれて私は何も思い浮かばなかった。

何かの対価になるようなものなど何一つ持っていなかったからだ。

【汝は我に何を支払う】

私の事なんてお構い無しに答えを要求してくる。

何か言わなくちゃ、そう思った私は彼女がさっき言った言葉を思い出した。

（わ、私の魂を支払う！）

【了承した】

最後にそう聞こえると、先程の男のように私の体を光が包み始めた。

彼とは違い、私は宙に浮かばずに段々と消えていった。

徐々に消えていく自分の体を見ながら、私はふと彼女の方を見た。

彼女はさっきからずっとこちらに背を向けて空に向かって叫び続けていた。

そんな姿を見て、私は彼女が可哀想に見えた。

『もう救われてるから大丈夫だよ』

どうしてもそう伝えたくて、どうせ聞こえないんだろうと思いいながら私は彼女にそう話しかけた。

別に返事を期待しなかったわけではない、でもこれほど近付いてるのに気づかれないんだから彼女には私が分からないんだろうと思っただけだ。

案の定彼女はこちらを見る事も無くひたすら叫び続けていた。

やがて私を包んでいた光が強くなり始めた。最後が近いんだろう。

なんだか頭に靄がかかったように意識が薄らいでいった。

薄れゆく意識の中で最後に彼女に別れの挨拶を試してみた。

『さようなら』

「え？」

そう言っていると、彼女はこちらに振り返った。

私と目が合うと何かを言うように口を開けた。

でも、彼女が何かを言う前に私の視界は闇に塗りつぶされてしまった。

ああ、最後彼女はなんて言おうとしたのかな。

そう思いながら、私は消えた。

プロローグ（後書き）

始めまして、万里雁です。

誤字、脱字、感想などバンバンお願いします。

あんた誰？

（前書き）

これから本編スタートです。

あんた誰？

「起立、礼！」

「」「さようなら！」「」

（うつしやゝ！やっと終わったぜ！）

委員長の号令によつて俺達はせまつ 苦しい学校生活から開放された。
何にも無い退屈な日常。

そんな毎日に飽き飽きしてた。
でも明日からは夏休み。

これは否が応うにもテンションが上がりまくるぜ。

さてさて、どうやって過ごそっかな。

なんて考えていると、クラスメイトの秋山が俺に声を掛けてきた。

「裕也、この後皆で打ち上げすんだけど、お前どうする？」

「すまん、俺この後バイトだわ。また今度誘ってくれや」

「そっか、じゃあな」

そう言うとき秋山はクラスの連中の輪に戻って、また何やら盛り上がっていた。

（さてと、バイトでも行くかな）

「お疲れさんした〜」

「おう！帰り道気を付けろよ」

「いやいや、俺男ですから」

「そうだったな、わっはっは」

本当に店長はテンションが高いな〜。

俺だって十分テンション高いって自負してるけど、店長のはさらにその上を行ってんな。

ま、そのおかげでバイト中も退屈しないけどね。

（んじゃ、さくさく帰りますかな）

俺は店の近くに止めてあった愛車サイクリングバイクに颯爽と跨ると、夜の街へと漕ぎ出した。

10分位漕いだだろうか、帰り道の半分くらいまで来ると道の真ん中に見慣れないテントが立っていた。

（おいおい、邪魔だな〜。不法投棄か？）

そう思いながらも自転車を止めてテントを良く見ると、テントの側面に、

『ミスターDの人生占い！』

とドでかく書いてあった。

ミスターDって何だよ!?

つか、こんな所でやってたらお巡りさんに怒られるんじゃない?

そんな事思いながら俺の足は自然とテントの方に向かっていった。
昔から好奇心が旺盛だと有名な俺には、このおもしろテントは見過
ごせなかった。

残った1パーセントの理性が必死に止めていたが、そんなのを無視
して俺はテントの中へと入っていった。

(な、何じゃこりゃー!!)

テントの中へ入った俺を待っていたのは驚愕の光景だった。
だって、見た目はそこら辺にあるテントだったのに、中に入ってみ
るとそこは、

雲の上だった。

慌てて入ってきた方を振り返っても、そこには何も無くただ永遠と
雲の絨毯が広がっているだけだった。

(やばい!やばい!これはやばすぎる!)

俺はらしくも無くテンパツって、その場をぐるぐる回り始めた。
だって、携帯も繋がらないんだぜ?
さっきまではバリバリアンテナ3本立ってたのに、いきなり圏外に
なってるし。

最終的にはこんな事まで考える始末。

（これってもしかして俺死んだ？ここって天国？）

「いんや、まだ死んどらんし、ここは天国なんかじゃないよ」

「え？」

いきなり声が聞こえたと思って振り返ると、さっきまでは誰も居なかったはずなのにそこには絵本かなんかで出てくる魔法使いが着てそうなローブを着た20代前後の金髪の男が居た。

「おっさん誰？」

「おっさんじゃない。私の名前は……アレックだ、アレック」

それって絶対今考えただろ。

この人きつと変な人だな。

でも、今は少しでも情報を集めなくちゃ。

「じゃ、じゃあ、アレックさん。ここは何処なんですか？」

「アレックで良いですよ。裕也君は何処だと思っ？」

「いや、わかんないから聞いたんすけど……」

「そうだったな、ここは夢と希望の世界ノーリック。お前の前居た世界からすれば異世界って奴だ。どうだ？ワクワクして来ただろ？」

「……は？」

「だから、ここは夢と希望の」

「いや、聞こえなかったんじゃないよ！え？ここが異世界だって？マジで言ってるの？」

「おお、マジだ、マジ。どうだワクワクしてきたか？」

「してこねーよ！さっさと返してくれよ。俺今までの世界で十分ですよ」

「嘘だろ？」

「え？」

「お前は今までの世界で満足なんてしてなかった。違うか？」

「ち、違う。俺は、俺は・・・」

「ほら、やっぱりそうだろ？そうじゃなきゃこの世界には来られねーんだから」

「この世界に来られない？」

「そうだ。この世界に来るたった1つの条件が『今の世界に満足していない』だ。そういう奴等の前だけにあのテントは現れる」

俺の頭の処理速度をまったく無視したまま、アレックはどんどん話を進めていく。

「まあ、別に分かんなくなっただけいいよ。ここでお前が求められるの

はたった1つだけだ」

そう言うアレックは俺の後ろを指差した。
そこには1つの門があった。

「あれが元の世界に戻る門。そして、」

アレックが足踏みをする、と雲の中からもう1つの門が出てきた。

「これがノーリックに進む門だ」

「ちょっと待て、ここがノーリックじゃないのか？」

「違う、違う。ここはただの分岐点。いきなり連れてったらすすが
に理不尽だから、ここで選ぶの」

「何を」

俺が聞くとアレックは、俺の後ろにある門を指差して、

「元の世界に戻るか、」

自分のすぐ横にある門を指差して、

「ノーリックへと進むかを」

「選ぶ？どっちに行くか」

「そうだ。別にこのままもとの世界に戻ったっていいんだぜ？そし
たら、二度とあのテントはお前の前に現れないから、一生退屈に過

「ごしてもらっただけだから」

「そっちを選んだら？」

俺はアレックの横の門を指差しながら言った。

「こっちを選べば、あなたはノーリックへと旅立つ。そこに行けば、あなたが元の世界では絶対に過ごせなかったスリルのある充実した人生を送れるでしょうね」

そう言うとアレックは、ダンスを踊るような動きで俺の後ろに回りこむと、俺の耳元で囁いた。

「強制はしません。さあ、お選びください」

俺が振り向くとそこにはもう誰も居なかった。
ここには、俺と2つの門があるだけだった。

（選ぶ？そんなの最初から決まってるじゃないか）

俺は真っ直ぐにその門へと近付いた。

「どっかで聞いてんだろ、アレック！俺はこっちを選ぶぜ！」

『本当に良いんですか？』

姿は見えないがアレックの憎たらしい声はしっかりと聞こえた。
俺はその声に力強くこう答えた。

「ああ、待ってるノーマリック！」

俺は門に飛び込んだ。

これから先何が待ってるかなんてまったく分からない。
だけど、絶対に後悔しない人生を送るために。

- - - - -

裕也君が門に飛び込んで数分が経った頃再び私は“そこ”に降り立った。

「やっぱり、彼はこちらを選びましたか」

（ね？私の言う通り♪）

「そうですね。では、見せてもらいましょうか、裕也君。貴方の紡ぐ新しい物語を」

あんた誰？

（後書き）

はい、どんな感じだったでしょうか？
誤字、脱字、感想などバンバン受け付けてます。

ギルド

「おっとつとと」

門をくぐるとその先はさつきまで居た雲のうえのような場所じゃなく、どこかのジャングルのように木々の生い茂る森の中だった。

「ここがノーリックか」

「そうですね、ここがノーリックですよ」

こいつは何時もいつたい何処から現れんだよ。

「で、俺はここで何をすればいいんだ？」

「別に何でも自分のやりたいようにやっていただいて結構ですよ。まあ、とりあえずギルドに登録ぐらいはしといってください」

「ギルド？」

「ええ、この世界で生きていくには身分証明書が必要になります。どっかの国の国民として登録するより、ギルドのメンバーとして登録しといった方が色々と便利ですからね」

「それは何処に行けばできるもんなんだ？」

アレックは何処から取り出したのかは分からないが、手に持っていた杖をどこかに向けた。

「こつちの方角に1時間ぐらい歩いていけば、ヒーネスという町があるんで、そこで登録できるんですよ」

「じゃあ行つていいすか？」

「待つてください。あんたそんな格好で行ったら、町に入るところかそのまんま捕まっちゃうですよ？」

確かに今の俺の服装は学校からバイトに直接行つたので、学生服のままだ。

「ちょっと目を閉じててね」

俺が目を瞑ると、頭を叩かれた。

目を開けると俺の服装が学生服から、RPGの主人公が着てそうな感じの服に変わっていた。

「服はサービスで、こつちが本題です。そのギルドってのは、この世界で旅をしたり人助けをしたりする人達の集まりで、まあ詳しい事はギルドに行ったらそこの人に教えてもらってください」

アレックはローブの中から手紙を出すと、俺に押し付けてきた。

「それをギルドの人に見せれば、簡単にギルドの冒険者登録ぐらいはできますよ。後このバックは、あの青い狸のポケットみたいまでとは言いませんが、ある程度の物までなら詰め込めます。手紙もこの中に入れときますね」

「ありがと、・・・もう行つていい？」

「これで一通り終わりです。行つて構いませんよ」

だったらサクサク行きますか。

俺は一応アレックに頭を下げると歩きだした。

「ああ、最後にもう1つ。何があつても森の主には近付いちゃいけませんからね」

「森の主つて何だよ!？」

(変なフラグ立ててくんじゃねー!)

振り向いた先にもうアレックの姿は無かった。

あいつ最後まで良く分かんない奴だったな。

森の主が何だかは分からないけど、関わんなきゃ良いんだろ。

とりあえずウンガネスつて町に向かう。

それから俺はひたすらただひたすら歩き続けた。

アレックが一時間で着くと言つてたからすぐに着くもんだと思つたら、なんと3時間もかかった。

アレックは今度会つた時絶対ぶつ飛ばす。

途中で何人かの人ともすれ違つたりしたが、服を着替えていたおかげで特に目立ったりはしなかった。

アレックの言つてた通り学生服みたいな服を着てる奴は居らず、そ

の点についてだけはアレックに感謝した。

そんなこんなでやっとこさ着いたヒーネスの街は、とてつもなく大きかった。

森の中を歩いている時はどうせこじんまりとした街だと思っていたが、着いてみるとそれはそれは予想のはるか上を行っていた。

建物も1つ1つ綺麗でとても過ごしやすそうに思えた。

人の数も尋常じゃなくて、通りの殆どの場所が満員電車のような状態だった。

それでも、ギルドとか言うところに行かなきゃいけないので押しに潰されながら道行く人に聞いてみると一発で分かった。

そして、現在ギルド前に居ます。思った感想は、

（ぼつつろ！）

今まで見てきた建物の中で一番ぼろくて、台風でも来たら跡形もなく吹き飛ばされそうだった。

それでも一縷の望みに懸けて中に入ってみると、中も普通にぼろかった。

とりあえず受付のお姉さんに登録したいと言うと、名前とか年齢とか住所とか聞かれた。

名前と年齢までは答えられたのだが、最後の住所で俺は固まった。だって俺何処にも住んでないんだもん。

「今日この世界に来たばっかで何処にも住んでません！」

なんて言えないから途方に暮れてると、段々とお姉さんの俺を見る目が変わってきた。

そんな俺はアレックの渡して来たあの手紙の事を思い出した。

俺は急いでバックの中から手紙を出すと、お姉さんに押し付けるよ

うに渡した。

お姉さんは最初は胡散臭そうな目で手紙を見ていたが、途中でいきなり目を見開いて手紙を凝視すると奥に引っ込んで行ってしまった。その後10分ぐらい1人で待っていると、お姉さんが帰ってきた。でっかいおっさん連れて。

おっさんは出てくるなり、俺の肩をいきなり掴んで来た。

「き、君がこの手紙を持ってきたのか？」

「そうですね、どうかしたんですか？」

「どうしたもこうしたも無い！アレックは何処に居るんだ！」

「知りませんよ！なんて書いてあったんですか！？」

「『俺の弟子が世話になる。面倒よろしく』って書いてあったんだよ！って事は君は彼の弟子なんだろ？何処に居るか知らないのか？」

「本当に知りませんってば！偶然会っただけですから」

「そうなのか・・・、やっと手がかりが掴めたと思ったのに」

「アレックと知り合いなんですか？」

「知り合いも何もあいつはこのギルドの冒険者だ！」

「え！？」

「それもただの冒険者じゃない、Sクラスの冒険者だ」

ギルド（後書き）

誤字、脱字、感想バンバン受け付けてます。

幻龍

アレックがとてつもなくすごい人だって分かった後、

このギルドのマスターだと言うあのおっさん（名前はギルと言うらしい）に、今まで田舎で暮らしていて良く分からないと言ってギルドの事とこの世界のことを教えてもらった。

その後ギルの紹介で泊めてもらうことになったパライスと言う宿の自室のベッドで、俺は胡坐を掻いていた。

この宿はギルドの新人がある程度自活できるようになるまでの寮のような物らしい。

俺の前にあるのはさっきギルドで貰ったデータカード。

これには俺の個人情報を書いてある。

ちなみに今書いてあるのは、

名前

ユウヤ

年齢

16

ランク

G

身分

アレックの弟子

名前と年齢は自分で教えたんだから納得できる。

ランクだつて冒険者になつたばかりだからGなのも分かる。

でも、身分の『アレックの弟子』って何だよ!?

いったいいつ俺がそんなのになつたんだよ!?

何度やり直しても、これだけは変えられないらしく諦めた。

もう色々面倒臭くなつて来たから、依頼は明日からって事にして今日はもう休む事にした。

次の日

俺は重い足取りでギルドへと向かった。

ギルドに入るとそれまでは騒がしかった中がシーンと静まり返つた。なんだか殆どの奴が俺のこと見てるし、男に見られても嬉しくねー! そう思いながら初心者用の依頼を掲示板に探しに行こうとすると、何人かのマッチョな人達が俺の事を取り囲んできた。めっちゃ恐いし、めっちゃくちゃ汗臭い。

「お前がああの6皇のアレック様の弟子とか名乗ったユウヤって餓鬼か?どんな奴かと思つたらただのモヤシじゃねーか」

(何がモヤシだ、お前らがでか過ぎるだけだろ。それに俺はアレックの弟子じゃねー!) ↑ 恐くて口に出せない

「何にも言い返さねーのか?そんな奴がアレック様の名前を出すん

「じゃねー！」

（俺だってあんな奴の名前なんて言いたくねーよ！）↑恐くて口に出せない

「やっぱりデマだったのか、おめーらこんな餓鬼置いて行こーぜ」

（二度と来んじゃねー！）↑恐くて口に出せない

何だかよく分かんないが男達は言いたい事だけ言つと行つてしまった。

（アレックもここでは有名人なんだな。俺には関係ないけど）

掲示板を見ると、さすが初心者用らしく薬草採取の依頼ばかりが殆どだった。

中にはゴブリンとかの弱い魔物の退治の依頼もあったけど、俺は武器を何一つ持っていないので出来る筈が無い。

とりあえず俺にも出来そうな依頼を適当に選んで、受付に行った。

「これとこれとこれやります」

「分かったわ、頑張ってくださいね」

「はい、行つて来ます」

その日はひたすら街の近くの草原で薬草を集め続けた。

最初の方はサクサク薬草が見つかったが最後の方はなかなか見つからず、終わったのは結局夕方になって大分暗くなった時だった。

俺は集めた薬草を持ってギルドに戻った。

朝の時のように俺の事を見るような奴は誰も居らず、スムーズに受付まで行って薬草を渡した。

「はい、ご苦労様でした。これは報酬の30000ルオンです」

ルオンはこの世界のお金の単位で、1ルオンが元の世界で言う10円ぐらいらしい。

だから、今日の稼ぎはだいたい3万円ぐらいだ。

（今日1日で3万の稼ぎか。案外いい仕事かもな）

そう思いながら、俺はパライスに戻ってベッドに倒れこんだ。

自分で思っているよりも、疲れたようですぐに俺の意識は堕ちていった。

それからギルドに行って依頼を受けて、街の外の草原行って薬草集めて、またギルドに戻ってお金貰っての繰り返しだった。
そんな日々が続いて約1ヶ月。

ついにこの日がやって来た。

「おめでとうございます。ユウヤさんはギルドランクがGからFに上がりました」

やっとランクが最低のGからFに上がりました。
めっちゃくちゃ嬉しいです。

「これからユウヤさんはあちらの普通の掲示板にある依頼をやって
もらいます」

「え？もうあそこは使えないんですか？」
あそことは初心者用の掲示板の事だ。

「はい、今度からはあちらのをお願いします」

「そうですか・・・」

（さようなら、初心者用掲示板。お前の事は忘れないぞ）

「それとこれからの依頼は魔物の退治が主になりますので、武器を
ちゃんと持ってくださいね？確かユウヤさん武器持ってませんでし
たよね？」

「はい、何処で買えばいいんですか？」

「ギルドお勧めの武器屋があるので、そちらで。今地図と紹介状書
きますね」

武器屋かあ、なんか楽しみだな。

「ええっと、ここで良いんだよな？スプラヤ武器店」

ギルドのお姉さんに教えてもらった武器屋は、ギルドから少し歩いた所にあった。

中に入ってみると店中のいたる所に剣やら槍やらが置いてあった。

「どちらさんだい？」

奥の方から声がして、初老のお爺さんが出てきた。

「ギルドの紹介で武器を買いに来たんですけど」

「そうかいそうかい、わしがスプラヤだ。何が欲しいんだい？」

「武器の事とかよく分かんないんで、何か見繕ってもらえませんか？」

「分かったよ、ちょっとこっちに来て顔を見せなさい」

「顔ですか？」

「顔というよりは目だ。目を見ればそいつに何が一番合うか分かる」

そう言っと、スプラヤさんは俺の目をじいつと覗き込んできた。

10分くらい経っただろうか、やっとスプラヤさんが離れてくれた。

「お前さんは、うーんと何だろうな、何がいいのかまったく分から

ん」

「おい！さっき分かるって言ったばかりじゃねーか！」とは言えずに、

「え？分かんないんですか？」

「そつだ、今までこんな事は無かったのにな。歳かあゝ」

スブラヤさんは肩をがつくりと落として、いすに座ったまま動かなくなってしまった。

「とりあえず剣ありませんか？何か無いと依頼が受けられないんで」

「そこにある樽の中身は全部10000リオンだ。好きなものを選ぶといい」

スブラヤさんの言う樽の中には大小様々な剣が大量に入っていた。俺はその中から自分でも振れそうな剣を探していると、何だか変な物が出てきた。

それは剣の中では珍しく刀のような形状で、さらに鞘の部分に何重にもお札のような貼られていた。

少し力を込めてみると、刀は簡単に抜けてその刀身が露になった。

銀色に輝くその刀はとても神秘的だった。

「スブラヤさん、この刀なんですか？」

「ああ、それはな昔旅の奴から売られたんだが誰にも抜けない妖刀だ」

「え？抜けましたけど？」

そう言つて刀を見せてみると、スブラヤさんは座つたいすを倒しながら俺に問い詰めてきた。

「ど、ど、ど、どうやったんだ!？」

「落ち着いてください!普通に力込めたら抜けたんですよ」

「ならばお前は選ばれたのか“幻龍”^{げんりゅう}に。だったらそれ持ってけ!もちろんタダだ」

「良いんですか?」

「おお!俺が生きてる間に幻龍の抜身を見せてもらつたお礼だ。大事に使えよ」

「はい!」

俺はその他に動くのにあんまり邪魔にならない程度の防具を買つて店を出た。

ちなみに、そっちのお金はしっかりと払われました。

店からの帰り道、早速俺は幻龍を腰に差した。

「じゃあ、これからよろしくな。幻龍」

これが俺の生涯の相棒となる幻龍との出会いだった。

幻龍（後書き）

誤字、脱字、感想などバシバシ受け付けてます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8675y/>

一人ぼっち異世界

2011年11月26日17時53分発行